HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国の新農村建設における郷村観光の重要性に関する研究 ： 大連市を事例として
Author(s)	張, 広帥; 森重, 昌之
Description	日本計画行政学会第33回全国大会. 平成22年9月10日～11日. 札幌大学（札幌市）.
Relation	日本計画行政学会第33回全国大会研究報告要旨集
Issue Date	2010-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44122
Type	conference paper
File Information	keikaku.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中国の新農村建設における郷村観光の重要性に関する研究
－大連市を事例として－

The Importance of Chinese Rural Tourism in New Village Construction Program
: Case Study of Dalian in China

○張　広帥（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻修士課程）
森重 昌之（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程）

１．はじめに

中国では、急速な経済成長の裏でさまざまな問題が指摘されており、特に農民の貧困状態、農業の低生産性、農村の非合理性をいう「三農問題」は、中国の地域社会や経済の持続的発展への大きな阻害要因になっている。中国政府は三農問題の解決に向け、2005 年の中国共産党第 16 回全国大会において、農民の生活水準の向上と農村の生活環境の改善を目標とした「社会主義の新農村建設」を発表した。新農村建設では、都市と農村の均衡ある発展や農村の近代化、社会制度の改革など、5 つの方針が示され、「城郷一体化（都市化）」を中心とした施策が積極的に進められている。一方、1980 年代に始まった「郷村観光」は農村の新たな産業となり、三農問題の 1 つの解決手段となる可能性を持っている。しかし、新農村建設における都市化が、郷村観光を推進している地域においても進められることで、郷村観光が継続できなくなることが懸念されている。

本研究では、三農問題の解決に向けて進められている新農村建設の推進手段の 1 つとして、省や市、鎮などの地方政府が郷村観光を具体的施策として位置づける必要性を指摘するとともに、そのための方策を提案することを目的とする。なお、本研究を進めるにあたり、大連市旅游協会への聞き取り調査、および大連市郊外の紅旗鎮岔鞍村（チャーアンソン）で郷村観光を行っている事業者「幸福農家院」の現地調査を実施した。

２．調査対象地域の概要

大連市は中国遼寧省の南部、遼東半島の先端部に位置する面積 13,237km^2、人口約 620 万人の港湾都市である。大連市は中国有数の港湾機能を生かした石油化学工業や造船業などが集積しているほか、物流機能の充実を図っている。一方で、大連市には年間 2,500 万人以上の観光客が訪れることから、新農村建設の方針に基づいて農村の地域資源を観光に活用する施策を展開しており、その 1 つとして郷村観光の推進に取り組んでいる。

本研究で取り上げる紅旗鎮岔鞍村は、大連市中心部から西へ約 12km に位置し、面積が 28km^2、1,800 世帯、5,400 人が暮らす農村である。岔鞍村は、森林面積が 2,200ha を占める山に囲まれた地形で、山々から流れる河川によって水資源も豊富で、ダムが多い。また、果樹面積が 140ha を占め、イチゴ、サクランボ、リンゴ、モモ、ナシなど、さまざまな果物を生産していることから、岔鞍村は「北方果物の郷」と呼ばれている（郭娜 2009）。岔鞍村では、農産物だけでなく、豚や鶏も含めた自給自足の生活や農家らしい家屋や庭など、

自然に囲まれた農村生活を体験できることから、後述するように大連市政府の支援の下で、積極的に郷村観光を進めている。

３．郷村観光とその特徴

郷村観光とは、「主に地域住民が主体となって農村の特徴を持つ地域で行われる、自然環境や農業、景観、文化などの地域資源を活用した観光形態」である（張広帥 2010）。郷村観光の類似語として、農業観光や農村観光、農(漁)家楽などがあるが、郷村観光は①農村だけでなく、農村の特徴を持つ地域で行われる活動である、②農業体験以外の第 2 次、第 3 次産業も含んだ活動であることが特徴となっている（張広帥 2010）。郷村観光は、1980 年代から農民の生活水準の向上や「都市・農村交流」などの手段として注目されてきた。郷村観光が発展した背景として、ライフスタイルが変化したことや、農産物や農村生活などに対する都市住民の関心が高くなったことがあげられる。

郷村観光の発展段階は、以下の 3 段階に分けることができる（趙鑫 2008）。第 1 段階は郷村観光の「自立発展期」（1980 年代～）であり、郷村観光に対する国家旅游局の主だった支援は見られず、各地域が独自の活動を進めてきた。第 2 段階は「政府の提唱による発展期」（1990 年代～）である。国家旅游局は、1998 年に初めて「華夏城郷游」をテーマとして示したほか、1999 年には分散型長期休暇制度が導入され、郷村観光の振興に取り組み始めた。第 3 段階は「強力発展期」（2000 年代～）である。国家旅游局は 2004 年に郷村観光のモデル地域を指定したほか、2006 年を「中国郷村観光年」、2007 年を「調和郷村観光」に定め、大規模な広報活動と開発事業を展開した（郭娜 2009）。その結果、中国の郷村観光はモデル地域から観光地や大都市近郊の農村、さらにその他の農村へと広がっている[(1)]。

このように、郷村観光が国家政策に位置づけられるにつれ、郷村観光は農村の新たな収入源の 1 つとなり、農村に経済的豊かさをもたらし始めている。また、農民は地域固有の自然環境や文化を観光資源として観光客に提供することで、経済面の効果だけでなく、自然環境や文化の保全、農民の生きがいの創出、誇りの醸成などの効果も生まれている。こうした郷村観光が、三農問題の解決に寄与する一方、欧州各国で見られるルーラル・ツーリズムのように、農村の持続的発展の新たな手段として期待されている。

４．岔鞍村における郷村観光の現状と問題点

（1）岔鞍村の郷村観光の取り組み経緯と現状

前述したように、岔鞍村は郷村観光の基盤となる農業・農村資源に恵まれた地域であるが、農業の近代化を推進するため、2002 年から郷村観光に取り組み始めた。岔鞍村では「都市住民の自然とのふれあい、農業生産や農村生活の体験」を目的に郷村観光を進めており、大連市の都市住民を中心に、多くの観光客が農家レストランや自然体験、健康などを求めて訪れている。岔鞍村は大連市近郊の農村であるため、観光客の多くは日帰りの都市住民であり、宿泊観光客は少ない。また、現在郷村観光を営んでいる約 40 戸のうち、3 分の 2 が自宅農家を改装して事業を行っている。

岔鞍村の農民は当初、地域の食や風景を活用した郷村観光を進める自信や経験がなかったため、郷村観光に取り組もうとする農民はほとんどいなかった。そこで、大連市政府や紅旗鎮政府が地元農民に対し、すでに郷村観光に取り組んでいる地域への視察や職業訓練などをバックアップしたほか、経営の許可を簡素化するなどして、郷村観光の推進を積極的に支援した。その意味で、岔鞍村の郷村観光は政府主導の取り組みといえる。

2002 年当初は約 30 戸が郷村観光に取り組み始め、2005 年までに 100 戸に増やすことを目標としていた。その後、2005 年に約 50 戸に増加したものの、現在は約 40 戸に減少している。事業者数が減少した要因として、利益を過度に追求した結果、サービスの質が低下したり、顧客ニーズに対応できなくなったりしたことが事業者により指摘されている。他方で、郷村観光を目的に訪れる観光客は増加しており、聞き取り調査を行った「幸福農家院」ではピーク時に受け入れできない状況となっている。

郭娜（2009）によると、岔鞍村の郷村観光には以下の 4 つの形態があるとされている。それは、釣りや登山、収穫体験などのサービスを提供し、マスツーリストから家族旅行まで受け入れ可能な「総合レジャー型」、果物やビニールハウスでの野菜を収穫する「農業体験型」、農家を改装して農家ならではの生活を体験する「農家体験型」、自然や花に囲まれ、欧州の小さな町にいるような雰囲気を楽しむ「花園別荘型」である。

岔鞍村で 2 階建ての農家を改装して農家レストランや宿泊サービスを行っている「幸福農家院」は、地元出身の夫婦が経営している。もともと彼らは農業を営んでおり、豚や鶏などの家畜も飼育している。現在は自家で生産した素材を使った農家レストランが事業の中心であるが、岔鞍村の生態圏センターで栽培している野菜や果物の収穫体験を観光客に紹介することも行っている。他の郷村観光事業者と同様、大連市の都市住民が観光客の 90％を占め、その多くが日帰り観光客である。宿泊観光客数は年間 100 名程度と少ない。

幸福農家院への聞き取り調査によると、郷村観光を目的に訪れる観光客のマナーは高いとのことで、マスツーリズムで指摘されるような観光客による悪影響はほとんど感じていないとのことであった。むしろ、観光客のマナーを見て地元農民のマナーが改善されるなど、経済面以外の効果も評価していた。

（2）岔鞍村における郷村観光の課題

これまで述べてきたように、岔鞍村では大連市政府や紅旗鎮政府が主導的に郷村観光を進めてきた結果、現在は多くの観光客が訪れる農村となっている。しかし、大連市旅游協会元理事長の瀋継濤氏によると、大連市政府は農民がより高い収入を得られるよう、地域外からの資金確保によって規模を拡大し、団体観光客に対応できる郷村観光の実現をめざしている。そのため、幸福農家院のように団体観光客に対応できない小規模事業者が淘汰される可能性が出ている。実際に岔鞍村の地元農家も、政府が進めている計画によって、今後事業が継続できなくなるかもしれないことを懸念していた。このように、大連市政府の支援によって進めてきた郷村観光であるが、政府自身が経済成長を追求するあまり、郷村観光の発展が阻害される可能性が出ている。

また、岔鞍村は大連市近郊に位置しているため、都市化の政策のもと、中心部の開発圧力の影響を受けている。村内には現代的な建築物が増加したり、企業が進出したりすることで、以前に比べると都市化が進んでいる。郷村観光は自然環境や農産物、農村の文化や景観が重要な資源であるが、こうした都市化の進行によって、岔鞍村の郷村観光は一定の収益を確保しているにもかかわらず、継続が困難になる可能性が大きい。

５．おわりに

本研究では、大連市近郊の岔鞍村の取り組みを事例に、郷村観光の現状と課題を分析してきた。その結果、岔鞍村では大連市政府の主導のもとで郷村観光を推進し、観光客が増えるなどの効果が現れていたほか、地域資源の価値の再認識や地元農民のマナー向上など、経済面以外にも効果が波及していた。このように、岔鞍村の郷村観光は三農問題の解決に向けた一助となっていたが、大連市政府がより高い経済効果を求め、郷村観光の事業規模の拡大を図ろうと考えているため、小規模事業者による郷村観光を継続できない可能性が出ていることが明らかになった。

そもそも、新農村建設は農民の所得向上だけでなく、農民の主体性や自主性を尊重することで、三農問題の解決をめざす政策である。郷村観光の規模拡大による経済効果も重要であるが、それによって郷村観光の基盤となる自然環境や農村文化などが失われ、郷村観光の「マスツーリズム化」によって岔鞍村の魅力を損なう可能性がある。

そこで、地方政府は新農村建設の推進手段として都市化だけでなく、郷村観光も施策として位置づけることが重要ではないか。もちろん、農村の地理的条件や資源の賦存状況などによって、都市化の方が高い効果を得られる場合もあろう。そのためにも、大連市政府は農村の実情を把握するための統計データを収集するとともに、郷村観光が農村に与える経済的効果、地元農民のニーズや生活・文化面に与える影響を調査し、農村にもたらす総合的な効果を明らかにする必要がある。また、地方政府は短期的な効果に目を向けるだけでなく、郷村観光の理念やビジョン、戦略などの長期的な目標も明確にすべきである。一方、事業者や観光関係者は郷村観光による成果を地方政府や地域外に積極的にアピールすることも重要である。それによって、地域社会の状況に応じた三農問題の解決をめざすことが可能になる。小規模事業者が不安を抱えることなく、ある程度の収入を確保しながら生活の質を高められる郷村観光こそが、現在求められている姿といえよう。

【注】

(1) 本来、ルーラル・ツーリズムの主体は「農民」であるが、中国の場合は政府主導で推進していることから「政府」が主体になっており、その意味で郷村観光は初期発展段階といえる。

【参考文献】

郭娜（2009）『旅游村特色化建設及空間競合関係研究』東北財済大学修士論文, 74p.〔中国語〕
張広帥（2010）「郷村観光の定義とその重要性に関する一考察」『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』第 6 号, pp.83-90.
趙鑫（2008）『論郷村旅游与新農村建設』河南大学修士論文, 71p.〔中国語〕